

ジェンダーの視点が核禁止の力に

ユリアナ アクーニャ (Yulianna Acuña)

3月初め、ニューヨークの国連本部で開かれた核兵器禁止条約第3回締約国会議で、キリバスの被曝者がジェンダー視点で核兵器禁止へ運動を語り、満場の拍手を浴びました。日本 AALA から参加した新潟県 AALA の谷本盛光理事長が録音を起こし翻訳して紹介してくれました。

議長殿、会場の皆さん

私の名前はジュリアナ・アクーニャです。私は今日、核軍縮から重要な声を排除し続けると私たちがどのようなリスクを負うかという警告を体現する若い女性として、皆さんの前に立っています。私たちは、核兵器の重荷を背負う人々の声に真摯に耳を傾けるのです。

核兵器の現実は女性の体に刻まれています。科学的に、女性が放射線被曝のリスクを2倍にさらしていることが示されています。しかし、真の原因は統計だけでは測れません。それは世代を超えた母と娘の物語にこだまします。核実験によってコミュニティは永遠に変わりました。苦しんでいる人々に強いられた沈黙は、地域の安全のために必要でした。

女性が説明のつかない奇形で生まれた赤ん坊を抱きしめるとき、彼女らが決して産むことのない子供たちに本を読むとき、彼女たちが、私たちの集団的失敗で傷つき不純だと烙印を押されるとき、彼女たちは冷たい沈黙に直面します。この集団の周りを見回してみてください。核兵器について議論している人のうち、女性が4分の1未満であり、若者の声がほとんど聞かれないのは、性別や世代ギャップの問題に直面しているのではなく、私たちの知恵の深刻な問題に直面しているのです。私たちは、核兵器がコミュニティに何の犠牲をもたらしたかを深く理解している人々の視点を見逃しているのです。

被害を受けたコミュニティの物語は、私たちの注意を喚起するものです。マーシャル諸島では、かつて伝統的な権威の地位にあった女性たちが、土地だけでなく尊厳も奪われました。屈辱的な検査を受け、人間ではなく汚染された物として扱われました。キリバスでは、社会の柱であった女性たちが、核実験によってコミュニティの構造が崩壊するのを目の当たりにしました。先祖代々の土地とのつながりは断ち切れ、目に見えない脅威に対して、彼女たちの伝統的な知恵は無効でした。

しかし、はっきりさせておきたいのです。これは被害者の話ではありません。これは力と変革の物語です。組織的な排除にもかかわらず、女性、特に若い女性は戦います。私たちは核被害を受けたコミュニティで前進を目指します。私たちは単に集結する女性の数を増やすことを目指しているではありません。私たちは行動と提起を通じて、核兵器の実際の人間への影響に対処するために、軍縮の議論が従来の安全保障の概念を超えて進化する必要があることを示すのです。核兵器禁止条約は、ジェンダーの影響と女性の参加を認めることで扉を開きました。今、私たちは目的と信念を持ってその扉をくぐらなければなりません。具体的な行動が必要です。

尊敬する代表の皆さま、

核軍縮の未来は、核兵器を生み出し、維持したのと同じ家父長制の基盤の上に築くことはできません。それは、多様な視点、生きた経験、最もコストを負った人々の洞察の上に築かなければなりません。伝統的な安全保障の物語の時代は過ぎ去りました。今こそ新しいアプローチが必要です。最も影響を受ける人々の声を排除したままでは、真の安全は達成できないのです。これらの兵器の拡散、備蓄、維持は、国際関係のビジョンを強化し、私たちの集団的不安を深めるだけです。核の緊張が高まる中、防衛と抑止に基づく政策が私たちをさらに混乱に導くという反駁の余地のない証拠があります。ジェンダーの視点は私たちに革命的なものを提供します。恐怖ではなく合理性への道です。支配ではなく協力です。そして、人類の存在そのものを脅かすのではなく、人類に役立つ安全保障のパラダイムです。

私たち、世界の若い女性は、この議論に声以上のものをもたらします。私たちは、コミュニティの警戒心、信念の強さをもたらします。そして、核兵器のない世界を作るという揺るぎない決意をもたらします。未来は、私たちが核兵

器のない世界を作ることを見守っています。私は今作るよう招待されています。明日許可されたときではなく、今なのです。

【録音・翻訳 谷本盛光】